

令和5年の熱中症による救急搬送状況

消防本部消防署

熱中症による救急搬送人員数について、令和5年5月から9月の確定値をとりまとめましたので、その概要を公表します。

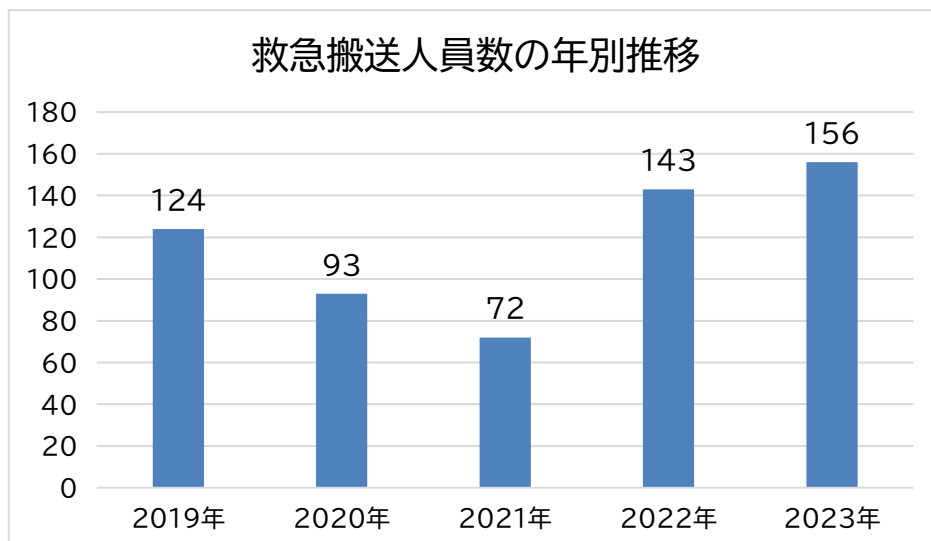
- 令和5年の小山市消防本部における熱中症による救急搬送人員数は、156人でした。これは、昨年（令和4年）の救急搬送人員数に比べると13人多くなっています。（昨年（令和4年）の熱中症救急搬送人員数は143人でした。）
- 熱中症による救急搬送状況の年齢区分別、傷病程度別等の内訳は次のとおりです。
 - ・救急搬送人員数の年齢区分では、高齢者（満65歳以上）が最も多く、次いで成人（満18歳以上65歳未満）、次いで少年（満7歳以上18歳未満）、次いで乳幼児（生後28日以上満7歳未満）の順となっています。
※新生児の搬送はありませんでした。
 - ・搬送された医療機関での初診時における傷病程度をみると、軽症（外来診療）が最も多く、次いで中等症（入院診療）、次いで重症（長期入院）となっています。
※死亡はありませんでした。
 - ・発生場所ごとの救急搬送人員数をみると、住居が最も多く、次いで仕事場①、道路、公衆（屋外）の順となっています。

概要

1 総数

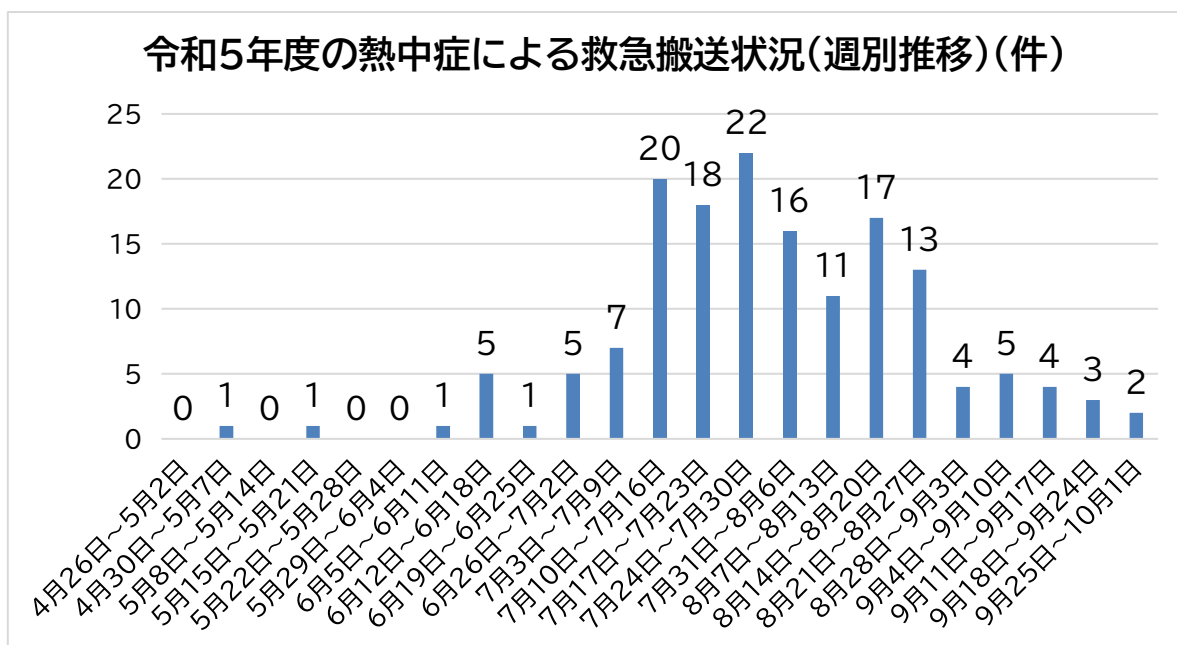
過去5年間の熱中症による救急搬送人員数は、以下のとおりです。

今年の熱中症による救急搬送人員数は、156人でした。これは、昨年の救急搬送人員数に比べると13人多くなっています。



2 調査開始から各週別の救急搬送人員数

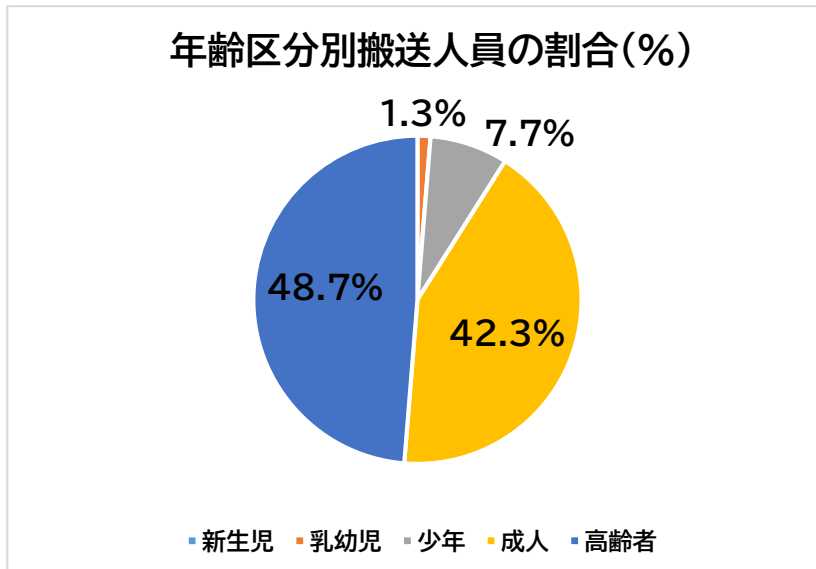
7月24日～7月30日が最も多く22人、次いで7月10日～7月16日が20人、次いで7月17日～7月23日が18人の順となっています。



3 年齢区分ごとの救急搬送人員数

高齢者（満65歳以上）が最も多く76人（48.7%）、次いで成人（満18歳以上65歳未満）が66人（42.3%）、次いで少年（満7歳以上18歳未満）が12人（7.7%）、乳幼児（生後28日以上満7歳未満）が2人（1.3%）の順となっています。

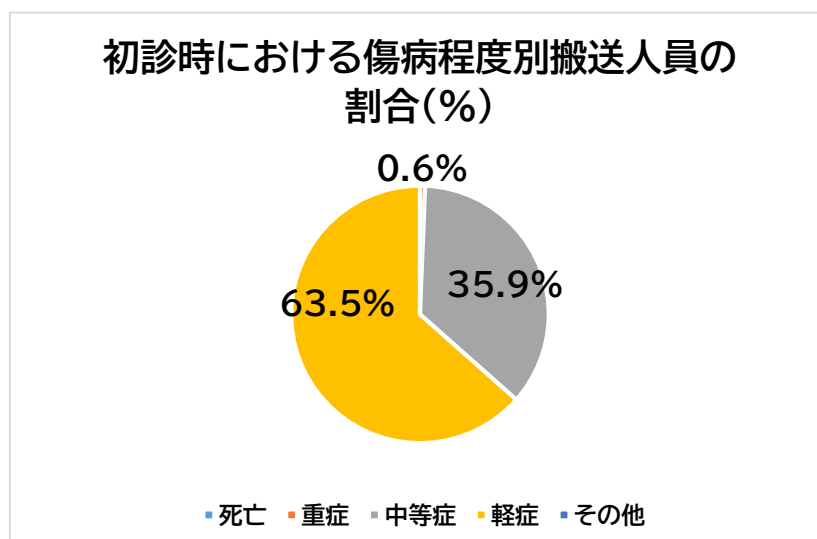
※新生児の搬送はありませんでした。



新生児:生後28日未満の者
乳幼児:生後28日以上満7歳未満の者
少年:満7歳以上18歳未満の者
成人:満18歳以上65歳未満の者
高齢者:満65歳以上の者

4 医療機関での初診時における傷病程度ごとの救急搬送人員数

軽症（外来診療）が最も多く99人（63.5%）、次いで中等症（入院診療）56人（35.9%）、次いで重症1人（0.6%）という順になっています。※死亡はありませんでした。



死亡:初診時において死亡が確認されたもの

重症(長期入院):傷病の程度が3週間以上の入院加療を必要とするもの

中等症(入院診療):傷病程度が重症または軽症以外のもの

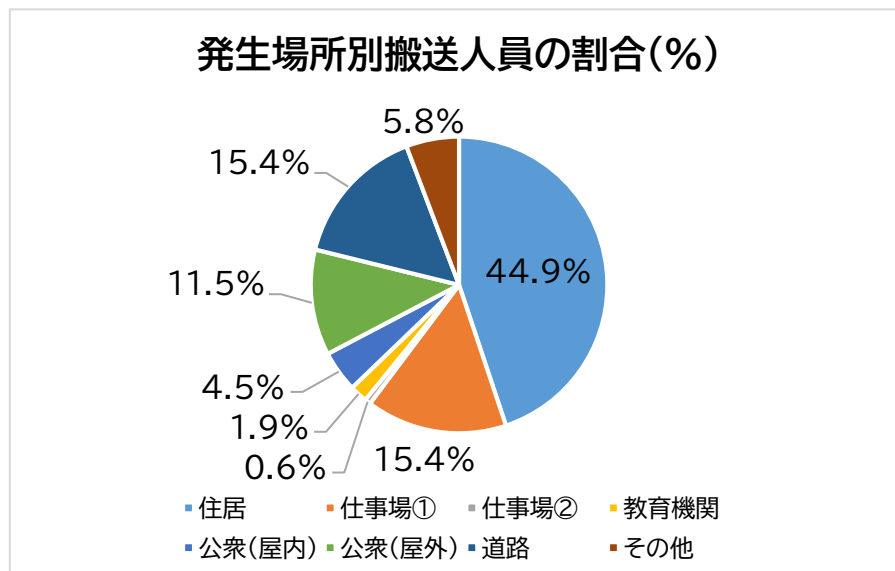
軽症(外来診療):傷病程度が入院加療を必要としないもの

その他:医師の診断がないもの及び傷病程度が判明しないもの、その他の場所へ搬送したもの

※なお、傷病程度は入院加療の必要程度を基準に区分しているため、軽症の中には早期に病院での治療が必要だったものや通院による治療が必要だったものも含まれる。

5 発生場所ごとの救急搬送人員数

住居が最も多く70人(44.9%)、次いで仕事場①および道路の24人(15.4%)、次いで公衆(屋外)が18人(11.5%)、次いでその他が9人(5.8%)、次いで公衆(屋内)が7人(4.5%)、次いで教育機関が3人(1.9%)、次いで仕事場②が1人(0.6%)の順となっています。



住居(敷地内全ての場所を含む)

仕事場①(道路工事現場、工場、作業所等)

仕事場②(田畑、森林、海、川等 ※農・畜・水産作業を行っている場合のみ)

教育機関(幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校、専門学校、大学等)

公衆(屋内)不特定者が出入りする場所の屋内部分

(劇場、コンサート会場、飲食店、百貨店、病院、公衆浴場、駅(地下ホーム)等)

公衆(屋外)不特定者が出入りする場所の屋外部分

(遊技場、各対象物の屋外駐車場、野外コンサート会場、駅(屋外ホーム)等)

道路(一般道路、歩道、有料道路、高速道路等)

その他(上記に該当しない項目)

※割合の算出にあっては、端数処理(四捨五入)のため、割合の合計は100%にならない場合があります。